

不登校の児童生徒の保護者のみなさんにお便りします

やまびこ



兵庫県立但馬やまびこの郷
<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>
E-Mail:Tajimayamabiko@pref.hyogo.lg.jp

“しなやかな家族”をめざして

但馬やまびこの郷では、不登校及び不登校傾向の子どもを持つ保護者の研修及び交流の機会として「やまびこ親の会」を開催しています。平成28年度も、8月27日（土）～28日（日）に実施しました。

1 思春期の親子関係 ～所長講演～

思春期の子どもは、「甘えたいけど放っておいてほしい」のように、気持ちが揺れ動いたり、周囲の変化に対応しにくいため、精神的にも身体的にも疲れます。一方、親は思春期を迎えると体力がない、ストレスにも対処できない等、自分の変化に戸惑いを持ちます。思春期の子どもと思春期の親という一番しんどい組み合わせが、親子関係を難しくする要因となるのです。



人を尊敬したり信頼したりしながら思春期の子どもは成長していきます。しかし、親は情緒的結びつきが強すぎて子どもを縛ってしまいます。むやみに非難したり、ついついやみを言ってしまったり…。そうではなく、理解したり、共感したり、見守ったりすることが大切です。しなやかな家族を目指すためにも、親は頑張りすぎない、心配しすぎない、面白がるといった適度な情緒的結びつきで子どもと接していきましょう。

2 みんなで楽しもう ～創作活動、ゲーム～



お互いを知り、仲良くなるゲームや製作活動を体験していただきました。まるで子どもに戻ったように歓声が沸いたり、製作に集中したりと心の底から楽しまれています。



3 楽な気持ちになれた ～保護者交流会～

子どもの様子や保護者の悩み、OBの方の経験談を話していただきました。「OBの方に勇気づけてもらった」「気持ちがほぐれ前向きな気持ちになった」等の感想がありました。

【交流会の話から】

- ・「このままだったらアカン」と思っていましたが、「この子は今無理だ」と考え方を変えると、気持ちが楽になりました。
- ・子どもは感じる力が強く、気疲れしてしんどくなっています。あれこれ言わずに待ち、ちょっと殻を開いたときに、何かすることが出来るようになればいいなと思います。
- ・何でも「ダメ」と言っていては先に進まない。むしろ、子どもが好きなことを見つけ、「嬉しい」と感じる方が良いのだと思いました。
- ・子どもがやりたいことを親も一緒に経験し、一緒に楽しんでいきたいです。



まことさんからのメッセージ

魂が追いつくまで…

兵庫県立但馬やまびこの郷所長 佐藤 眞子



「いつも家では憂うつそうな顔をしています。外に出ることもなく、教科書もいっさい開こうとしません」先日お会いする機会があった中学生をもつある母親が、すごい勢いで話し始められました。「小学生のときは、塾にも行っていて、サッカーもしていました。スイミングもどんどん上級クラスになっていきました。何も問題はなかったんです」「スポーツも勉強もがんばっておられたんですね」と、がんばり屋さんのこの子に何が起きたのか、私は母親の話に耳を傾け続けます。

担任の先生から勧められて、中学校のスクールカウンセラーさんにも相談されたようです。スクールカウンセラーさんは「もう少し待ってあげてください」と言われたそうです。母親は「待ってあげてと言われますが、いつまで待てばいいのでしょうか。私もこれまでけっこう待ってきましたけど‥」

魂を置き去りに

「待つ」という言葉を聞くと、必ず思い出す話があります。私もどこかで取り上げたことがあり、これまで多くの著作等で引用されてきてるので、ご存じの方も多いと思いますが、1989年1月1日に朝日新聞に掲載されたミヒヤエル・エンデによる文章です。



何年か前、中米奥地の発掘調査に出かけた研究チームの報告を読んだ中にこんなことがあります。

調査団は、必要な機器等の荷物一式を携行するためにインディアンのグループを雇った。調査作業の全行程には完璧な日程表ができていた。そして初日から四日間はプログラムが予想以上によくはかどった。運搬役のインディアンたちは屈強で、従順で、日程どおりに事が進んだのだ。

ところが、五日目になって、彼らは先へ行く足をふつり止めた。だまって全員で輪になり地べたに座りこんで、もうテコでも荷物をかつごうとしない。調査団の人たちは賃金アップを提案したが、だめだった。(中略) 日程には大幅な遅れが生じた。

と、突然(二日後のことだった)インディアンたちは同時に全員が立ちあがった。荷物をかつぎあげ、予定の道を前進しました。賃金アップの要求はなかった。調査団側から改めて命令したものでもなかった。

調査団の学者たちにはインディアンたちが口を閉ざしたままであったので、どうしてこのような不思議な行動をとったのか分からなかったのですが、ずっと後になって、インディアンのひとりが答えを明かしたといいます。「はじめの歩みが速すぎたのでね」「わたしらの魂(ゼーレ)があとから追いつくのを待っておらねばなりませんでした」と。

この報告を読んで、エンデは「私たちの魂は、もうはるか以前に途上に置き捨てられました」「魂を捨て子にしたことで、肉体が病んでいきます」「魂不在の世界—これが私たちの走りゆく目的地だったのでしょうか?」と書いています。

21世紀に生きる私たちは、エンデが生きた時代以上に「魂」を置き去りにして、前へ前へと歩もうとしているということはないでしょうか?もっと速く、もっと高く、もっと強く、もっと便利に、もっとたくさん、もっと、もっと…。

子どもと共に待つこと

人たちが、速い時間の流れの中で、合理性と効率性を追求している時代にあって、子どもたちの魂の時間はどうなっているのでしょうか?かつての子どもたちは、やわらかな風とたわむれ、たっぷりと光を浴び、大地を踏みしめ、キャッキャと笑いころげて、ゆっくりと心も身体も大きくなってゆくものだったように思います。そして、学校で過ごす子どもたちの時間は、成長しつつある皆と魂を共有している時間であったに違いありません。しかし、残念ながら現代はそうした時間を過ごすことが難しくなっているように思います。そのため、魂の不在に敏感な子どもたちが、ひとり、またひとり、と座りこんでしまうのです。



なぜ座りこむのか、どうして前に進もうとしないのかという大人たちの問いかけに、うつむいて座りこんでいる子どもたちが明確な答えを示すことはないでしょう。お腹が痛いから、頭が痛いから、胸が苦しいからというような身体の不調を訴えることもありますし、黙りこくったり、かんしゃくをおこしたり、あるいは先生が嫌い、友達がいじわる、勉強が分からぬといったとりあえずの理由を言う子どももいるかもしれません。

何だか不快、何だか不安というもやもやした気持ちが形になるには、時間がかかります。「言いたいことがあるなら言いなさい」と言われても、子どもたちはそう簡単には表現できないものなのです。そんなとき「自分の気持ちなんて、そう簡単には分からぬと思うよ」「何でもめんどうに思ってしまうことってあるよね」「学校に行きたい気持ちもあるけど、なかなか行けなくて困っているって感じなのかなあ」などと、もともと言いながら、何もしないで、一緒にそばにいてくれる身近な大人がいたら、子どもたちの気持ちはずいぶん違ってくるような気がします。混乱が少しずつおさまり、自分を大切に思う気持ちが芽生えてくるかもしれません。「自分ってそうなのか‥」と自分についての発見も生まれます。魂が少しずつ追いついてくるを感じます。

親として、なかなか動こうとしない子どもに対して「いつまで待てばいいの」と焦る気持ちも理解できないわけではありません。しかし、焦っても簡単に事が進みそうにないならば、とにかく子どもと一緒に「地べたに座り、魂が追いつく」のを待ってみてはいかがでしょう。一見無駄と思えるこうした時間は、私たち大人にとっても、思いがけず、豊かな体感をもたらしてくれるのではないか‥というようにも思えます。

やまびこフェスタ

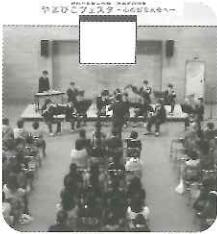
～心の虹を未来へ～



昨年10月30日(日)に「やまびこフェスタ～心の虹を未来へ～」を開催しました。地域の方や初めて当所を訪れた方にもたくさん参加していただきました。

オープニング演奏

自由ヶ丘高等学校吹奏楽部の皆さんに「花は咲く」など、なじみ深い曲を披露していただきました。12人の息の合ったすばらしい演奏でした。



兵庫教育大学ボランティアステーション

兵庫教育大学の学生の皆さんによる「落ち葉で作る秋のしおり」「お茶席」。小さなお子さんから大人の方まで楽しんでいただきました。



新コーナー登場

ストラックアウトコーナー、輪投げコーナーでは多くの子どもたちが高得点を目指してチャレンジしました。綿菓子コーナーでは自分で綿菓子作りに挑戦。皆さんとても上手に作っていました。ポップコーンや焼き芋の評判も上々。その他にも、石のペンダントやプラ板などの製作活動をしたり卓球やビリヤードをして遊んだりと、楽しいひとときを過ごしていただきました。



不登校の経験を生かして

当所の活動において、子どもたちを支援する学生ボランティアをメンタルフレンドと呼んでいます。年齢が近いこと也有って共通の話題も多く、子どもたちの支えの一つとなっています。今年度、中学生時代に当所を経験した学生が5名、メンタルフレンドとして活動しました。自分が経験したことを話したり、子どもたちの悩みを聞いたりするうちに、自然に子どもたちのモデルとなっています。お別れ会でも「私も○○さんのようになりたい。メンタルフレンドとして来てくれてありがとう」と感想を述べる子どももいました。経験者がメンタルフレンド活動を終えた感想を紹介します。

- ・自分の体験を聞かれることが多かったので、ありのままを話しました。私の話を聞いて少しでも前向きになってくれるといいなと思います。お別れ会でも保護者の方が泣きながら「あなたの存在に勇気が出ました」と言ってくださったことがとても嬉しかったです。これからも恩返しは続けます。(K・K)
- ・私がメンタルフレンドを目指したきっかけは、中学生の時のメンタルフレンドに手紙をもらったことです。その手紙には「素直なところがいいところ」など、嬉しい言葉がたくさん書いてあり、辛いときには何度もその手紙を読み返していました。今回初めてメンタルフレンドになりましたが、次は私が誰かを勇気づけられるようにしていきたいです。(Y・H)
- ・自分が但馬やまびこの郷で経験した楽しかったことや嬉しかったことを、今苦しい思いを抱えている子どもたちに少しでも伝えられたらいいなと思い、活動に参加しました。最初は不安な表情を見せていましたが、だんだんと活き活きした姿に変わっていき、「またやまびこに来たい」と言ってくれたことが何よりも嬉しかったです。(S・M)

